欧文誌の意義

岡 村 誠 三*

英文の原報を載せる Polymer Journal (仮称) を高分子学会から刊行する計画が数回の理事会で相談され、また欧文誌発行準備委員会で詳しく吟味された結果、さる 2 月 24 日の理事会で本決まりとなった。この計画によると、発行は来年 1970 年 1 月より隔月刊として年 6 冊の予定で毎号 15 篇前後の原報と数個の短(速)報とが載り 120 ページ前後となる見込みである。内容は非常に高いレベルのものを目標とし、若くて活発な方を編集者および審査員に依頼する計画と聞いている。年の購読料は 5,400 円以上にはならぬように学会の方で経済的な検討が進められている。

ここでは、準備委員会で約 1 年の間に話し合われた事項や学会の会員から寄せられたアンケート、その他によるご意見をまとめて賛否両論に分けてお伝えしたい。発行が決定した今日では、賛成論の理想が達成されるように、また反対論の欠陥をなくするようにするための今後の努力目標になればと思って急いで筆を執った。

この際まず耳を傾けねばならないのは、主として反対論である。科学全般ないし学界という立場から、すでに雑誌の多すぎる今日、このうえ新しい刊行物をふやすべきではないという意見は本質的である。科学の進展からおこる分野の細分化や研究人口の増加のために研究論文発表の方法を根本的に変えない限り、既存の雑誌だけでは論文が載せ切れなくなる。好ましいことではないことがわかっておりながら、毎年毎年新しい雑誌が各国でスタートしている。次は英文(または欧文)誌を日本で出すことに対する疑問がある。外国語で発表するという考え方は明治感覚を百年以上に延長する危険思想だという気持がある。もうよいかげんに横文字から脱却したいということもあり、日本語で書かれた「高分子化学」の方を学会としてもっと力を入れるべきであろうという意見も多い。「高分子化学」は十分に大きく発展して行かねばならないだろうし、英文の要旨と図表の説明が添えられているので広い読者層も期待できるはずである。しかし地球上に存在する多数の国語というものが少なくとも人類文化とか科学の進歩という立場からだけ見ると、その数を減らして行くということもまた意義あることと思われる。英語やロシア語によるという自然の流れにまかせないで、エスペラントのような世界語をという動きもこれから盛んになってきてよからう。少なくとも電算機国際語の試みは科学的に可能であろう。日本語の雑誌を国際誌にする努力とどちらが容易かを考えねばなるまい。

新しい雑誌を出す以上世界中の研究者に広く読まれる必要があるが、そのために惹き付ける特徴を何か持たねばならない。どうも日本で出してこれが特徴だといえるものがなさそうだという意見がある。投稿してから掲載発行までの時間を短くできれば一つの大きい特徴となりうる。現在どの雑誌でも 10 カ月前後の時間がかかっているの、これを 4~5 カ月ぐらいまでに短縮できれば大きい特徴となる。東京での印刷は確かに早い英文審査という余分の仕事が入ってくるので全体としてどのくらいスピード・アップできるかやや疑問もある。また英文審査(英文の polish-up)を会社などに特別の関係がない在住外人に依頼するとして、専門に近い人を何人集められるかといった問題もある。一度スタートすれば途中で止めることはほとんど絶対にできない。したがって赤字覚悟で少なくとも 1, 2 年ももちたえられる経済基礎をも考えておかねばならない。

賛成論では学会発行の専門誌が必要であるとする理由が最も強い。ACS の Macromolecules に次ぐものとなろう。レベルの高い新鮮な専門誌を高分子学会からぜひという声は一般的である。日本化学会の雑誌を文語体から口語体に直すのでさえ 30 年ぐらい前にはかなり抵抗があった由。現在の Bulletin の盛況や Japanese Journal of Applied Physics の高い評価を見ならいたい。さしあたり新雑誌へよい論文が早く多く用意される必要を痛感する。この一文もそのために急いでしたためたものである。

* Seizo OKAMURA 京都大学(工学部・京都市左京区吉田)教授・工博、欧文誌発行準備委員長